



# 神道

三重県神道青年会報 第34号

# 美しい国のために

## 会長 中野 哲彦



の日本は良くないのかとも思いますが、

最近の世情を見てみると、日本人らしさが無くなってきている様な気がします。特に若い女性が地べたに座りこみ、大きな声で騒いでいる風景をよく見かけます。いったい「やまとなでしこ」と言われるものはどこへ行ったのだろうか。昔、小泉今日子の歌に「ヤマトナデシコ七変化」という歌がありましたが、本当に変化してしまっただけとは冗談では有るが思います。また、映画では昭和三十三年の古きよき日本を舞台に、家族の触れ合いを描いた心温まる人情ドラマ『ALWAYS 三丁目の夕日』が流行りました。やはり、国民が求めているのは人情であるのかと感じさせられます。また、古きよき日本というのは裏を返せば、今

昨年九月に「美しい国」というテーマのもとに就任表明されていた安倍晋三首相が突然辞任された。『美しい国づくり企画会議』を設置し、教科書問題や拉致問題等期待することも多かっただけに残念です。一時は外国人向けにも美しい日本をPRすべく、テレビコマーシャルまで行っていました。二回の会議開催や事務所設置などで費やされた経費は四九〇〇万円であったらしい。しかし、そこまですたにもかかわらず現福田内閣に於いては「会議をやっただけでそれだけというのはいちよっと高すぎる。高すぎるということは無駄だということだ。」と指摘し何一つ採り上げられていません。そもそも美しい国とは何か、神宮の創祀説話が記されている「日本書紀」に『是の神風の伊勢の国は、常世の浪の重浪帰する国なり、傍国の可憐し国なり、是の国に居

らむと欲ふ』とあります。日本人として美しい国、即ち美しい国は日本の心のふるさとと呼ばれる伊勢です。従って、美しい国日本を語るには神宮また神道を知らなければならぬと思います。その為に、私たち青年神職は、国民が神社に関心を持って頂く様、活動を展開していかなければなりません。

神社に関心を持って頂く行事といえば、恒例のお宮の子供会があります。本年度は鈴鹿の伊奈富神社に於いて、「食育」をテーマに御祭神「保食神」を主人公にして御祭神名、性格を確実に覚えることを目的とし開催しました。役員で創作した「保食神」を題材とした劇は子供たちに理解してもらい易く工夫し、保護者には他の子供会と異なり、神職主催で有ることを強調すべく、開会式・閉会式はスタッフ全員が白衣、袴の姿で行いました。また、各新聞社・地元ケーブルテレビでも採り上げられて、青年神職の地域での活動をアピールできたと自負する所であります。

道徳心、愛国心というものは戦後の学校教育では難しい問題となってきました。今次の小中学校の新学習指導要領案は、教育基本法改正後、初めての改定で、教育基

本法に公共の精神を培うこと、伝統・道徳心の育成、生命・自然の尊重などが教育の目的・理念として盛り込まれています。しかし、学校でどこまで教育できるのかは不安です。寺子屋のように神社が地域の子供を集め、青少年の育成に取り組んでいく必要が有ると思います。そこで、毎年各神社で開催させて頂いているこのお宮の子供会が、そのきっかけとなれば幸いです。

我々青年神職は、来る平成二十五年の御遷宮に向け多くの方々に神宮をはじめ神社、神道について理解を頂くため諸活動を進めてまいります。また活動を通じ、古きよき時代の日本を取り戻し、一人でも「やまとなでしこ」が増え、美しい国になるよう貢献できたらと思います。その為にも、役員を始め会員が各種研修会等に参加し、研鑽を積んで若い神職ならではの企画・発想を練り、活発に活動に励んで頂きたいと思えます。どうか、今後とも、皆様方の御支援、御協力を頂くと共に御指導、御鞭撻の程何卒宜しく御願ひ申し上げます。

葉

榊

## 教化・研修委員長

### 副会長 石上 陽 祥



三年 三重県 神道青年 会の副会長 長の重職 を拝命してより一年の歳月が経とうとしています。この一年各社、各団体、会員諸兄からの暖かい御協力御支援を頂きました事、有難く心より感謝し、御礼申し上げます。

私が委員長をさせて頂いております教化研修委員会の活動を振り返ってみますと、諸先輩から受継がれてきた夏休みの恒例行事「お宮の子ども会」も二十九回目を迎

神宮神青との合同研修会では、「伊勢の観光」と題して、おかげ横丁にあります豆腐庵山中の社長山中一孝先生を講師にお迎えして、お話を伺いました。御師の伊勢や神宮に対しての役割、何故、一生に一度はお伊勢参りと全国に広がったのかなど、神職とは違う視点の伊勢について聞けたと思います。今後神道青年会の活動を通じて教化活動のあり方をみんなで考え、一層活発な活動方針を見出し、実路活動していけるように努力し励んで行きたいと思えます。最後に、諸先輩方、会員諸兄また御家族あって神道青年会でありますので御協力御支援のほど宜しくお願い申し上げます。

え、今回は鈴鹿市の伊奈富神社で神職子弟、氏子の子どもたち約五十名の参加のもと、テーマを「食べ物」の神様に集う」として開催しました。今回神社を通して食べ物への感謝の心を学んでほしいと、トマトやキュウリのまるかじり、自分たちで起こした火で焼く鳥の姿焼きなど企画し、私達は自然から命を貰い、又命から命を貰っていることを感じてもらったのではないかと思います。



## 涉外・福祉委員長

### 副会長 神田 基



平成十九年四月に副会長に選任頂き、早くも一年が経とうとしております。中野会長を始め役員、会員の皆様の御協力を賜りまして、大過なく務めさせて頂いておりますこと厚く御礼申し上げます。さて、本年度の涉外・福祉委員会では、新たな企画として「熊野古道研修会」を開催致しました。研修会というとスーツや白衣といったお堅いイメージがありますが、この研修会は頭之宮四方神社の正式参拝後に私服に着替え、三重県が誇る世界遺産、熊野古道を歩くといったものでした。普段我々が顔を合わせる時の服装はスーツや白衣が殆どですが、時にこうして私服で話すこと今までに見たこともないような個々の個性を知る事が出来ます。登山というが大袈裟ですが、共に語り・共に笑い・共に汗をかき・共に励まし合いながら大きな山を越えてゆく事。私はそこに「仲間」

というものを強く意識致しました。思えば今の神青にはこの意識が大きく欠けているように感じます。何か行事を企画しても「出張や出向の扱いにならないので参加出来ない。プライベートの時間を使ってしまう。ちょっと…」という声を耳にします。つまり、神青の活動を「仕事」と思っている会員が多いのです。確かに神青活動は趣味や遊びのように楽しい事ばかりではありません。仕事の延長と感ずることも多いかもしれません。活動をしていっても金銭的な収入はないかもしれませんが、やるだけ無駄なのではないか？それは大きな間違いです。

私は神青活動を通じて、同じ志を持つ多くの「仲間」と出会っています。これは今後の私の人生においてかけがえのない財産となるでしょう。価値観の違いはあるにせよ、私は自分の時間とお金をかけても惜しくない経験をさせて頂いていると思っております。お宮に籠もっているだけでは決して手に入る事の出来ない財産です。神青には若いうちにやらねばならぬ事、経験しなければならぬ事がある溢れています。それを手に入れるか見過ごすかは自分次第です。共に手を取り頑張りましょう！我々は「仲間」なのですから。

### 総務・広報委員長

副会長 佐藤了古



昨年四月よりこの役職に就いておられますが、この一年

の活動を通じて、あらためて職責の重さを感じております。己の経験不足を節々に感じ、反省のなかで学んできた一年でもありました。中野会長を始め役員、会員諸兄から御指導、御協力を頂きました事に、まず御礼を申し上げます。

私は、十八年度まで総務広報委員長として二回の「神青通信」と会報「榊葉」の編集を担当しました。今年度は同じ立場にあるものの、後継者を育成すべく他の委員に役割を分けました。委員の顔ぶれも一新し、時代の変わり目を予感させられました。

さて、本年も会報「榊葉」が完成し、無事発行することができました。関係各位には篤く御礼を申し上げます。とりわけ会員皆様には快く原稿を引き受けて頂き、ま

た委員の皆様には二度に亘る編集会議に参集のうえ、長時間の審議を頂き有り難うございました。

この一年を振り返りますと、恒例行事の「お宮の子供会」や「県内研修会」など、新たな試みもなされました。月一回ほど行われる役員会も、神社庁だけではなく役員会も、神社庁でも開催されました。中野会長のもと、何かを始めよう、変えようとする意気込みが伝わってくるようでありました。その一方で、各行事における参加者が少なく、歯がゆい思いも感じました。言うまでもありませんが、会員一人一人の情熱と行動がなければ何事も前には進みません。本会の活動に対する更なる理解と積極的な参加を願うものであります。総務広報委員会としても、本会の活動を会員皆様に周知すべく、広報の充実に努めて参りたいと考えております。

来る本会創立六十周年記念事業に向け、現在準備が進められていきます。先輩方が築いてきた本会の歴史を受け継ぎ、次世代へ守り伝えるべく、中野会長を中心に会員一丸となって取り組んでいきたいと思います。

### 役員紹介

会長	中野 哲彦	多度大社
副会長	佐藤 了古	神宮
総務・広報委員長	石上 陽祥	津八幡宮
原 忠照	八阪神社	
廣岡 靖晃	岡八幡宮	
芝本 行亮	神宮	
宮田 幸尋	敢國神社	
福井 健士	猪田神社	
廣岡 利彦	敢國神社	
廣岡 孝昭	菅原神社	
教化・研修委員長	遠藤 玲	土生神社
遠藤 嘉章	彌都加伎神社	
秋本 剛宏	椿大神社	
千秋 季嗣	神宮	
吉田 実生	多度大社	
渉外・福祉委員会	矢野 啓之	頭之宮四方神社
宮崎 吉史	結城神社	
菱川 由貴	神宮	
渡邊 守真	二見興玉神社	
監事	中野 雅史	三重縣護國神社
平野 直裕	多度大社	

### 会務報告

〈平成十九年四月〉	
一〇日	神社総代会定例総会
二四日	十一名助勢奉仕 神宮会館
二六日	第五九回神青協定例総会 本社本庁
	平成十八年度総会
	三十一名出席 本社本庁
	平成一七・一八年度卒業式
	四〇名出席 津市内
〈五月〉	
一四日	神道青年東海地区協議会
	三名出席 龍尾神社
〈六月〉	
一日	第一回役員会
	一四名出席 本社本庁
〈七月〉	
一三日	第二回役員会
	一二名出席 本社本庁
	新職員交流会
	三三名参加
一七日	津市体育館・本社本庁
	神道青年東海地区協議会
	四名出席 三嶋大社
二九日	桜が丘奉曳団川曳
	一二名奉仕
〈八月〉	
八日	第三回役員会
	一四名出席 伊奈富神社
二一・二二日	第二九回お宮の子供会
	一八名参加 伊奈富神社
二七・二八日	神青協定期セミナー
	五名参加 本社本庁

### 定例総会

平成十八年度定例総会が四月二十六日(木)、本社庁会議室にて中野会長以下役員、会員二十三名、来賓三名の出席にて開催された。

開会儀礼の後、会長挨拶、来賓の石上紀男三重県神社庁長・榊本浄三重県神社庁青年会担当理事・山元謙二三重県氏子青年協議会副会長より祝辞を頂戴し、その後高橋副会長を議長に選出し議事へと移った。

まず会長より十八年度会務報告、事務局より会計決算報告、監事より会計監査報告が行われ、夫々承認された。次に中野雅史会長任期満了に伴う役員改選が行われ、中野哲彦新会長、監事には中野雅史前会長、平野元副会長が選任され、副会長には佐藤理事・神田理事・石上理事が指名され、各地区よりブロック理事が選出、会長指名理事が指名され、新役員を代表して中野新会長より挨拶があった。続いて十九年度活動方針案並びに事業計画案、同会計予算案が審議されて承認を受け、定例総会は滞りなく終了した。(原記)

### 新職員交流会

七月十三日(金)、津市営体育館に於いて恒例の新入職員との交流会が開催された。本年は、会長を始め三十三名(新職員十九名)が参加し、バトミントンを楽しんだ。



試合は、ダブルス・トーナメント・ポイント方式で行われ、普段打つことのないシャトルに悪戦苦闘しながらも、コート内には楽しい笑い声が聞こえた。また、経験者同士の試合では白熱したラリーがくり返され観客を湧かした。そのなかでもチームワークで多くのポイントを獲得した中部チームが優勝。個人の部では松瀬・池村ペアが優勝した。

終了後は本社庁にて、表彰式並びに懇親会が行われ、新職員の自己紹介また質問交換が行われ、会員相互の交流を深め、充実した時間を過ごすことができた。(宮岡記)

### 第三十八回 上野・阿山氏子青年の集い

九月十五日(土)午後五時より総勢二百名参加のもと、ウエルサンピア伊賀にて開催された。例年は会長のみ出席であったが、本年は会として会長を始め十名が参加した。

この集いは「観月会」とも云われ、伊賀地区の氏子青年会が仲秋のこの時期に毎年開催している。当日は、上野氏子青年会森西会長挨拶で開会した。森西会長は挨拶の中で、ご自分の氏神にあって古木についてふれ「台風により倒れてしまったが、その切り株から新たな若木が育っている。我々も同じように連綿とつながっていくかねばならない」と語っておられたのが印象的であった。

その後、清興として上野高校弓道部による弓術や田守神社に伝わる獅子神楽の演奏、また射手神社伶人による雅楽の演奏などが行われた。懇親会では各氏子青年会の紹介や当会の紹介も行われ、会場は大変賑やかな雰囲気の中、それぞれの親睦が一層深まった。(廣岡靖晃記)

### 〈九月〉

一五日	第四回役員会
	一〇名出席 岡八幡宮
	上野・阿山氏子青年の集い
	一〇名参加 サンピア伊賀
一八・一九日	神道青年東海地区協議会及び教化研修会
	七名参加 浜松市内
〈一〇月〉	
三日	敬神婦人連合会定例総会
	助勢奉仕
	八名奉仕 神宮会館
一五日	第三六回初穂曳
	二名参加 外宮
一六日	第三六回初穂曳
	四名参加 内宮
二七日	氏子青年協議会・神道青年会合同研修会
	八名参加 神宮司庁
三〇日	三重県神社関係者大会助勢奉仕
	一〇名奉仕 神宮会館
	第五回役員会
	一四名出席 神宮会館
〈十一月〉	
九日	熊野古道研修会
	一二名参加
	熊野古道センター他
二八日	北部ブロック研修会
	一八名参加 飯野神社
〈十二月〉	
五日	敢國神社例祭助成奉仕
	四名奉仕
六日	神道青年東海地区協議会
	四名出席 静岡県神社庁
八日	神宮大麻頒布促進運動

### 第二十九回お宮の子供会

八月二十一日(火)・二十二日(水)、鈴鹿市鎮座の伊奈富神社(吉田恵子宮司)にて開催された。会長を始め会員十八名、参加小学生四十六名の計六十四名という大変賑やかな中での開催となった。今回のお宮の子供会は、近年減少傾向にあった参加人数を考慮するとともに、今一度神道教化の基本に立ち返るという意味も込めて、神職子弟と共に同神社の氏子地域の子供たちの参加も募った。

また、開催神社の御祭神、保食神(ウケモチノカミ)に因み、食べ物の大切さや尊さ、また感謝の気持ちをお子たちに実感してもらうことを主眼に取り組んだ。

さらに、開会式・閉会式では、



一神主として子供会を開催するという意味で、神職は白衣・袴を着用した。

初日は、神社境内の散策や市内のフレンチシェフ渋谷貞夫さんをお招きした野外料理体験、神青会員による演劇・きもだめしなどの「庭療の集い」を催した。翌日はホンダの工場見学に続き、伊奈富神社の奥宮でもある鈴鹿サーキット内鎮座の東岡神社を参拝した。

そして、今回初の試みとなったのは、私たち神主の道具に触れてもらう機会を設けたことである。

普段、触れることの無い、笏や烏帽子・狩衣などを身に付けた子供たちは、大変嬉しそうに作法をし、道具の由来を説明すると興味深く聞き入っていた。子供会を神社で開催する意味からすると、この試みは大変有意義であった。

二日間の日程中、野外料理の体験での子供たちは積極的に火をおこし、自分たちで選んだジャガイモを焼き、また共に食事をした。自分たちで努力した後の食事とあってか、子供たちは苦みな食べ物でも残さず、食べ物を大切にすることを自ずと実践していた。

一般の小学生の参加が初めてと

なった今回は、今までとは多少勝手は違ったものの、その成果はかなりのものであったように思う。

氏子意識が希薄になりつつある昨今、子供たちの地域のお宮さんに密着するこの二日間で、自分たちの氏神さまがどんな神さまなのかを知り、一つの思い出として愛着を持ってもらえたと思う。これが将来の氏子意識に繋がれば今回の試みは成功である。

今回のような子供会を来年再来年と続け、各地の氏神社を盛り上げていくきっかけとしてとらえ、今後私たちが神道青年会として実施していく神道教化の一つの雛形が、このお宮の子供会であると実感した。

(吉田 記)



一〇日 一三名参加  
名張市・つつじが丘  
第六回役員会  
一三名出席  
忘年会  
二〇名参加  
桑名市内

〈平成二十年一月〉  
三〇日 第七回役員会  
一三名出席  
伊勢市内  
新年会  
三〇名参加  
伊勢市内

〈二月〉  
二日 建国記念の日啓発活動  
(神宮ブロック)  
六名参加  
外宮前

四日 建国記念の日啓発活動  
(中部ブロック)  
七名参加  
津駅前

八日 建国記念の日啓発活動  
(北部ブロック)  
六名参加  
四日市駅前

一二日 中部ブロック研修会  
二六名参加  
神社庁

二七日 第八回役員会  
一二名出席  
神宮司庁  
神宮神青・県神青合同研修会  
二八名参加  
神宮育成会館

〈三月〉  
四〜五日 神青協中央研修会  
五名参加  
千葉市内

一七日 第九回役員会  
一二名出席  
神宮育成会館  
神宮・南部ブロック研修会  
五〇名参加  
神宮司庁

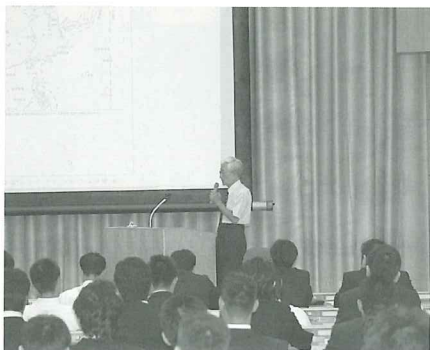
### 神青協夏期セミナー

八月二十七日(月)・二十八日(火)の両日、全国からの神青会員約百四十名の参加のもと神社本庁に於いて開催され、本会より五名が参加した。

「国家主権について考える」と題し、最初に久富真人神青協会長が挨拶された。また来賓としてお招きした自民党の有村治子参議院議員が閣僚の靖國参拝問題を取り上げ国民の国防、国家主権に対する在り方を提言された。

二日間行われた講義では、国防と領土問題の観点から専門家の各講師をお招きし講演頂いた。第一講は平松茂雄先生(元防衛庁防衛研究所研究室長)・第二講は山内敏秀先生(元防衛大学校国防論教育室教授)・第三講は濱口和久先生(日本政策研究センター研究員)

より、竹島・北方領土において現在日本が直面している諸問題、また日本の国防意識の現況と領土資源確保の問題について、実際の豊富な経験に基づくお話を拝聴した。現在の日本を取りまくさまざまな危機的状況を実感するとともに、国防の重要性を改めて痛感した。



(鏡谷 記)

二日目午後には、防衛省を見学、極東国際軍事裁判の法廷となった市ヶ谷記念館大講堂にて、広報官の方より市ヶ谷駐屯地の戦前、戦後の変遷について講義を頂いた。また、防衛省敷地内にある殉職者慰霊碑前で一同拝礼。その後、靖國神社へ移動し正式参拝、解散の運びとなった。

我々神職は日本国民が幸せに生活でき、日本が国家主権を正しく行使できるように、刻々と変わっていく世界情勢に敏感にならなくてはいけない。日々の神明奉仕の中においても、今以上に国を取り巻く状況と政府の動向、国防に対して問題意識を持つことが大切であるということを感じさせられた。

### 神道青年東海地区協議会 教化研修会

九月十八日(火)・十九日(水)の二日間にわたり、静岡県浜松市内各所を会場に、「日本を愛する心―国を守るという事―」をテーマに開催され、会長を始め七名が参加した。

一日目はホテルコンコルド浜松にて総会が行われた後、浜松市体育館にて親睦行事が行われた。

二日目は、航空自衛隊浜松基地に移動し滝脇博之先生(航空自衛隊浜松基地基地指令)より国防について御講演頂いた。「防衛力」とは外部からの侵略を未然に防ぎ、また一侵略を受けた場合、それを排除する国の意思と能力を表すものであり、その機能は他のどのようないかなる手段によっても代えることができないことを示された。

その中であって航空自衛隊の防衛力は、戦い全般の行方を決める大きな力であり、空において相手の戦力を上回り、大きな損害を受けることなく作戦を遂行するため中心的な役割を担っている。これは陸・海の作戦にも大きな影響を与えるもので、その意味で航空



(千秋 記)

自衛隊は、日本の防衛の「鍵」であると述べられた。また、領空へ侵入してくる航空機へ戦闘機を緊急発進させるなどの措置は、他の組織が代わることでできない大切な役割であり、航空自衛隊は日本の平和と安定、そして独立を守るため、日夜任務を遂行しているというお話を頂いた。

また、使用された各種航空機や現在・過去の各種装備品。輸送機や地对空ミサイル・滑走路で練習機の離着陸の訓練飛行まで見学させて頂いた。

国防のため日々任務に就く自衛官と、日本固有の伝統信仰である「神道」と「神社」を守ることに日々勤めている我々とは、日本を愛し日本を守るという点に違いはないのだと痛感した研修会であった。

### 第二次御木曳行事

七月二十九日(日)桜が丘奉曳団の川曳きに会長を始め十二名が参加した。

当日は五つの奉曳団により川曳が行われ、出発地点の県営競技場付近から順番に奉曳が開始され、およそ八百名が奉仕した。

目指す場所は、御用材の受け渡し場所となる内宮神苑。一キロほどの距離であり皆で曳けば、あっという間だがそこは二十一年に一度の行事。引き綱を左右に練り、木遣り唄と共に、楽しみながらゆっくりと進んだ。櫓を宇治橋のたもとから引き揚げるところが川曳のクライマックス。「エンヤ曳き」と呼ばれ、綱を持ち一気に神苑まで駆け込むのである。危険が伴うが心をひとつにして奉曳する。無事に御用材が神宮へ届けられると、周囲からは自然と万歳三唱の声が湧き上がった。皆それぞれに感動と役目を終えた満足感を覚えた。

(佐藤了古記)



### 第三十六回 初穂曳

十月十五日(月)、恒例の「初穂曳」が行われ、当会からは陸曳き二名、翌十六日の川曳きには四名が参加した。

「初穂曳」は第六十回式年遷宮を機に御木曳行事の伝統の継承と、初穂を大御神様に奉献することを目的として伊勢神宮奉仕会を中心に昭和四十七年から始められたものであり、



十五日の陸曳きでは、全国から集められた稲穂を御木曳車に載せ、外宮神域まで力を合わせて奉曳。外宮神域では稲穂の束を奉仕者一同が捧持して五丈殿へ納め、続けて御垣内参拝を行った。また、同日午後九時に外宮へ移動し神嘗祭由貴夕大御饌を奉拝した。翌十六日は、五十鈴川にて川曳を奉仕。初穂を載せた小舟の綱を地元の奉曳団や全国からの崇敬者とともに「エンヤ」の掛け声に合わせて曳き、内宮へ奉献した。

(秋本 記)

### 氏子青年会との合同研修会

十月二十七日(土)、伊賀市鎮座の春日神社(神田信忠宮司)に於いて開催され、会長始め八名が参加した。



開会式の後、「鎮守の杜からまちづくり」というテーマのもと三重県有形文化財に指定されている拝殿や大絵馬などについて宮司さまより御説明を頂き、その後獅子神楽を拝観した。

この獅子神楽は春日神社氏子青年会が中心となり継承していること、氏神様への思いや、地域の団結力に心を打たれた。その後、プリマハムの課外研修施設にてそば打ち体験、田楽作り、伊賀酒の試飲が行なわれ、そば打ち等慣れない作業に悪戦苦闘しながらも皆一丸となり協力して体験を終えた。終了後、懇親会を行い互いに親睦を深めつつ、両会が合同研修以外においても尚一層協力していくことを誓い合った。(宮本 記)

### 熊野古道研修会

十一月九日(金)、会長を始め十一名が参加した。

当日は頭之宮四方神社(村田正和宮司)にて正式参拝の後、熊野古道センターに移動。花尻薫センター長より熊野古道についての解説を賜った。続いて熊野古道の一部である馬越峠を語り部の植野めぐみ氏の引率の下、道中にある史跡の説明を聞きながら歩いた。

小雨が降る生憎の天候で、雨に濡れた石畳は滑りやすく一歩一歩足元を確認しながら進んでいった。肌寒い日であったが、歩き始めてからすぐに汗が噴き出すほど、想像以上に急勾配で険しい道であった。僅か四キロの距離とはいえず、森林浴や景色を楽しむ余裕も無く、熊野古道を踏破することはまさに命懸けであると実感した。



(三橋 記)

### 大麻頒布活動

十二月八日(土)本年も「一千万家庭神宮大麻奉斎運動モデル支部」として三年目を迎えた名張支部にて行われた。今回は百合ヶ丘(平成十七年)・梅が丘(平成十八年)につづき、つつじが丘団地の開催となった。

当日は会長を始め十三名の神青会員の外、支部内の神職・同総代会・同敬神婦人会、また神宮研修所の学生も参加し、総勢百名が活動を行った。

午前九時より積田神社(中森孝栄宮司)にて、大麻頒布始祭が斎行された。その後、神社総代一名・神職一名の二名一組(計四十六組)に分かれ団地内にて頒布を行った。四十六組で約三千九百戸をまわり、百五十四体を頒布できた。一組がまわったのは八十軒前後で、頒布できたのは約三体という計算である。土曜日で在宅されている方も多かっただけに残念であった。あらためて一体頒布することの重みと、一千万家庭頒布まで道のりの険しさとを実感した。

年々の頒布数が伸び悩むなかで、今回特に感じた事は、訪問先の方



の多くが何も知らないということである。まず、「天照大御神とはどういう神様なのか」「大御神をどうお祀りしている神宮とはどういうところなのか」そして、「神宮のお札である神宮大麻はどういうものなのか」これらの事を理解して頂ける方が増えれば、頒布数も格段に上がるのではないだろうか。「神宮大麻と伊勢神宮」。われわれ神職にとって、当たり前のごとく理解されていない現状を目の当たりにして、祭祀の厳守はもとより、中執り持ちとしての役割の重要性を再認識させられた。今後は、日頃の社頭奉仕を通じて、より多くの方々に神宮大麻の大切さを分かって頂けるよう考え、努めて行きたい。(近江 記)

### 神宮神道青年会との合同研修会

二月二十七日(水)山中一孝先生(勢乃国屋)をお招きして、「伊勢の観光について」と題して御講演頂き、会長を始め二十八名が参加した。職業柄、伊勢で観光者を御案内されていただけあり、神宮の歴史から、その歴史と共に生活をされてきた伊勢の人々の思い

まで、大変わかり易い内容であった。自分達は幸いにも、三重県に住んでいるため、いつでも参拝に行けるものと思っているが、遠い地域に住んでいる方はそう簡単にはいかない。それでも「一生に一度は神宮に参拝したい」。その思いが、一般に言われる「おかげまいり」となって表れたのだとつくづく感じた。

日本人の心の中にある神宮への思い、またその周辺で生活されている方々の、神宮との関わり等、改めて神宮の偉大さ、尊さを感じられた講演であった。

(遠藤玲 記)



### 神青協中央研修会

三月四日(火)・五日(水)の両日、千葉市のホテルニューオータニ幕張に於いて開催され全国各地から三六六名が集い、本会から会長を始め五名が参加した。

第一講は「家庭力」と題し、元衆議院議員で俳優の森田健作氏より、幼少時代の両親の思い出や苦労話を拝聴した。第二講は「いのちのバトンタッチ」と題し、特定非営利活動法人いのちをバトンタッチする会代表の鈴木中人氏より、長女を小児ガンで亡くした苦悩や経験を基に、いのちをみつめる意味を述べられた。第三講は明星大学教授の高橋史朗氏より「人間を育てる和文化教育」と題し、親が育てば子は育つという親学について教授頂いた。

親から子へ、子から孫へと受け継いできた己が為すべき使命を受け止め、神職として日本人の命脈を次代につなげ伝えていかねばならないと気持ちを引き締められた研修会であった。(渡邊 記)

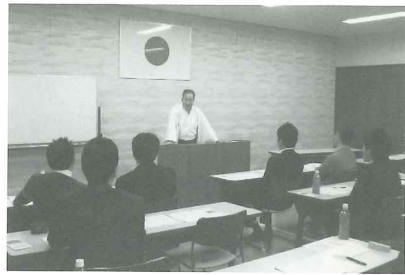


# ブロック研修会

## 北部ブロック

テーマ 「日本の政治と神職」  
 講師 飯野神社 佐野方比古宮司  
 開催日 十一月二十八日  
 場所 飯野神社  
 参加者 十八名

「神道政治連盟」は昭和四十四年十一月八日に設立され、設立の契機は昭和四十一年の神社本庁の神社審議会答申で強調された「法の改正は国会に決定権があるのだから神社本庁関係の全組織をあげて強力な推進団体を組織し、国会に代表を送り、積極的にこれに働きかける」ということに始まった。今では数多くの問題に関して運動しており、中でも靖國神社問題に関しては重要な問題として



て、毎年八月十五日には靖國神社に参拝されているとのことであった。この講話を通して、私は今の日本にはたくさん問題がある中、歴史と文化を守る為に微力ではあるが、社頭で氏子の皆様に日本を再生していけるよう講話し、氏子の皆様に理解して頂きたいと思つた。(遠藤嘉章 記)

## 中部ブロック

テーマ 「暦の読み解き方」  
 講師 樺大神社 山本行恭宮司  
 開催日 二月十二日  
 場所 三重県神社庁  
 参加者 二十六名

講義は主に九星盤について理解を深めることを念頭に進められた。生年月日をもとに本命と月命を調べ、九星盤に照らしあわせて方角の吉凶を判断する方法を板書や鋭い切り口で御説明頂いた。始めは各々九星盤を凝視しながら頭を抱えていたが、繰り返しパ

ターンを変えて練習することで、徐々に先生の質問にも素早く回答できるようになった。



暦といえど六耀くらいしか意識することがなかったが、他にも吉凶を判断する要素が沢山あることを知った。暦については「間違つた知識で人に教えてしまうと、取り返しのつかないことになる」という先生の一言を聞き、神職たるもの日々正しい知識を求め、祭祀とともに勉強にも励まねばならないと痛感させられた。(福井 記)

## 神宮・南部ブロック

テーマ 「浅沓について」  
 講師 西澤利一先生(西澤浅沓調進所)  
 開催日 三月十七日(月)  
 場所 神宮スカウト育成会館

西澤氏は伊勢市出身。高校卒業後、家業の紙玩具製作に従事。三



十四歳のとき江戸時代から代々伊勢で浅沓を奉製していた久田家に弟子入りし独立。現在に至るまで神宮をはじめ県内外の神社に浅沓を納めている。講演では、浅沓の歴史や製作過程について御持参頂いた写真や製作中のものを使いお話を頂いた。その後の実演では、木型に一枚ずつ糊を使い和紙を貼り付ける作業から最後の黒漆を塗る作業まで説明を加えながら見せて頂いた。浅沓が塗り終えた時には、まだ乾いてはいないがつやのある黒の美しさや、西澤先生の職人としての見事な腕前に参加者一同より大きな拍手が送られた。

伝統の技を守る苦勞と、本物の素晴らしさを改めて実感させられた研修会であった。(矢野 記)

# 建国記念の日の啓発活動

## 北部ブロック

活動日 二月八日(金)  
 場所 近鉄四日市駅前  
 参加者 六名

人通りの多いところに「建国記念の日」と書かれた幟を立て、路行く人に「建国記念の日をお祝いしましょう」と声をかけながら花の種と意義を書いた紙を手渡していった。

幟に目を向け立ち止まって「ありがとう」と快く種を受け取って下さる人、両手で丁寧に受け取って下さる方もいた。その反面、遠くから袴姿の私たちの存在を確認すると、目を反らし、さも関わりたくないという感じで足早に避ける人もいた。嘆かわしいことである。宗教として一括りには出来ない、日本人の生活の基盤となる神道、大



和の心を神社界からもっと強く配信しなければならぬと感じさせられる場面もあった。

今回の啓発活動によって、一人でも多くの人が建国記念の日に対する理解を深めて頂けることを願うと共に、単に「休みの日」という認識を越えて「祝日」の意義を理解し、祝う心が芽生えてくれるならば幸いである。(三橋 記)

## 中部ブロック

活動日 二月四日(月)  
 場所 近鉄津駅西口周辺  
 参加者 七名

中部ブロックでは、午後三時半より約一時間活動を行なった。時間が学生の帰宅時間と重なっていたため、配布は学生が中心であったが、駅を利用する多くの人に声をかけ、チラシと花の種を受け取って頂くことができた。

また活動中は「建国記念の日がどういう日なのか理解できた」といった声も聞かれ、建国をしのび、

国を愛する心を養う、という建国記念の日の趣旨を伝えられたと実感することができた。(兼田 記)



## 神宮ブロック

活動日 二月二日(土)  
 場所 外宮  
 参加者 六名

当日は外宮の参拝者を対象に火除橋前に行行った。

「二月十一日は日本国の建国の日です。それを記念して花の種を配っております」と参拝者に声を掛けると抵抗も無く受け取って頂けたので、こちらも気持ち良く活動を行えた。

年配の方は何の日か既に知っている事が多かったが、若年層の方は知らない事が多いように思われた。また全



体的には何故この日が建国記念の日なのか知らない方が多く、我々が今後もこういった活動を行い啓発していかねばと感じた。今回配った「西洋石竹」の花言葉は「熱烈なる愛」。これからも「熱烈」なる活動を行ってきたい。(赤井 記)

## 南部ブロック

南部ブロックは本年度、各奉務神社社頭にて配布した。二見興玉神社では門前の旅館街に訪れた方々への配布を行った。同町では、「おひなさまめぐり」と題された期間イベントが行われていた事もあり、大勢の方に建国記念の日の重要さを理解して貰えたのではないかと感じた。

社頭での配布も、参拝に訪れた方々に大変喜ばれ、参拝者から「国旗掲げるでな」と嬉しい言葉を聞く事も出来た。

この活動を通じて、多くの方々

に日本の誇る大和心を理解して貰いたい。(渡邊 記)

# 今、思うこと

三重県神道青年会監事

平野直裕

人々は古より神を信じ神社を心のよりどころとして崇拝してきた。その中で、神社の体制は幾多の変遷をうけ現在の体制が確立した。昨今時代の流れが急激に変化し、それに応じた対応を迫られ苦慮することが次々とでてきたような気がする。

まず、神社では、祭典終了後「なおらい」が行われる。神社本庁が定める、『神社祭式』にて、大祭式、中祭式、小祭式いずれの祭祀においても直会行事を行う事が定められ、共飲共食儀礼の觀念からも重要な行事である。だが直会では、通常お神酒が付き物である。ここ数年、飲酒により起こした交通事故による悪質運転者の増加に伴い、飲酒運転者に対しての道路交通法の罰則が厳格になってきた。当然、飲酒運転は以前より違反行為ではあるが、罰則の強化により改めてその違法性の重大さ

を再確認されている。この中で、神社においても、此等の事柄により、参列者の中で飲酒運転者が出ると、神社及び地域の多くの人に迷惑が掛かる事、そして飲酒運転撲滅の観点から過剰にその事柄に対応し「かわらけ一杯」の直会も自粛する神社がでてきている。

数年前、ダイオキシン問題が世間を騒がせた折も、宗教行事であるお焚き上げは、問題にはならないが、自主的にそれを自粛し、お焚き上げの分別を行ったり、持込の制限をしたりして出来るだけ煙り等が出ないように考慮し、その対応に対処した。現在もその様に行っている神社が多いと思う。神社は地域の核であるが故に、それらの対応に敏速に対処していかなくてはならないと思うが、昨今それらの対応は余りにも過敏感ぎるのではないかと思う。

明治天皇の御製の

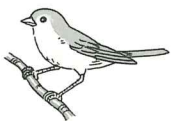
嵐吹く世にも動くな人心

いはほに根ざす松のごとくに

の様にわれわれは祭事を奉仕しなくてはいけないと思う。

精神的に恵まれない時代といわれ、クレームを付ける事が優秀であるような風潮の中、恐れる事無く、祭事をひとつひとつ忠実に執り行いたい、あまりにも過敏にそれらの事柄に対応する事によりその路線が歪みがちになってしまふ。社会情勢に反発するのではなく、その流れに沿って日々の奉仕を続けていかななくてはならないが、祭事の本質を忘れることなく続けていくことは今後一層難しくなるような気がする。

時代の過渡期とも言える今日に生きる我々は、氏子・崇敬者と共に、斯界のあるべき姿を今一度見据え直し、冷静に対処できる環境を作って行かなければならない。



表紙解説

熊野古道研修会

於 馬越峠

本年は、県内研修会の一環として行った「熊野古道研修会」の写真を表紙として掲載させて頂きました。写真は伊勢路の馬越峠の一部です。馬越峠は鷲毛から馬越公園までの約二キロが世界遺産に登録された道で、苔むした石畳が歴史を感じさせる街道中もとても美しいといわれる古道です。

この熊野古道は平成十六年七月七日、「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として、世界遺産に登録されました。

この熊野古道は平成十六年七月七日、「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として、世界遺産に登録されました。「道」の世界遺産は珍しく、スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」の巡礼路に続き二例目です。

信仰の道として、多くの参詣者を導いてきたこの熊野古道は、今も多くの人々を魅了しつづけています。

会報「榊葉」

第34号

平成20年3月31日

発行者 中野哲彦

編集 総務広報委員会

発行所 津市馬居町210-2

三重県神社庁内

三重県神道青年会